

三木レク通信② ～テキスト編～

2023年9月17日

※当稿は、武蔵野合唱団 53 回定期演奏会の開催にあたって
団員向けに配布された資料を元に、掲載するものである。

■三木稔とヴェラの出逢い

楽譜の冒頭（－作曲者のことば－）にもある通り、三木稔が『レクイエム』として作曲した詩は、1936年（1935年説もあり）にウィーンで出版された Eckart von sydow（楽譜冒頭での"Echart"はスペルミス）のドイツ語訳による**"Dichtungen der Naturvölker"**を底本として、浜野修が日本語に訳した『南方原住民の歌謡』（以下《浜野著》）に収められた一つ、〈**ヴェラを悼む葬送の歌**〉（以下〈ヴェラ〉）が基となっている。1944年の9月に発行された《浜野著》を、三木稔は藝大の学生時代に東京・神田の古賀書店で買い求めた。古賀書店は1919年に開業した音楽書専門の古書店だが、惜しむらくは2022年の12月で閉店してしまった。当時の店主は“歌謡”というタイトルに惹かれてこの本を発注ないし買取りしたのだろうか。いずれにしても三木稔と《浜野著》との出会いがなければ『三木レク』という作品は生まれなかったわけである。



■妻・那名子氏の協力

さて、〈ヴェラ〉を曲に相応しいテキストとすべく、その加筆は1957年に結婚した三木稔の妻・那名子氏が務めている。三木稔が活動初期に書いた独唱曲・合唱曲は那名子氏の詩によってほとんどが作曲されており、『レクイエム』にも那名子氏の力添えは欠かせなかった。

三木稔が感銘を受けた〈ヴェラ〉を基としつつ、〈ヴェラ〉の中には無い第五楽章の冒頭「**嵐を避ける逃げ場**」の描写は、《浜野著》の中から〈ヴェラ〉と同じマンガイア島の詩〈ウラの哀悼歌〉から採用されている。こうして那名子氏による改作と加筆を施された五篇の詩には、《**彼岸への対話**》のタイトルが付けられた。

■ 《彼岸への対話》の原典へ

さて、《彼岸への対話》の基となった〈ヴェラ〉は、マンガイア島ではどのような言葉（原語）で書かれ、どのような音楽が付いていたか、が言わば“『三木レク』マニア”にとっての関心の的であった。仮に音楽的な要素にたどり着いても作曲家の意図した全体像とは決して繋がらないのは承知の上で（三木稔も作曲当時、原詩や現地の音楽に触れていた訳ではない）、詩の側面から私がたどり着いた一冊の書が、1876年にロンドンで出版された《MYTHS AND SONGS from THE SOUTH PACIFIC》（私訳：『南太平洋の神話と歌』）、この中に〈ヴェラ〉は現地語の詩（現在の島の公用語のマオリ語に近い言葉）と、**<THE GHOSTS LED BY VERA PREPARING FOR THEIR FINAL DEPARTURE>**

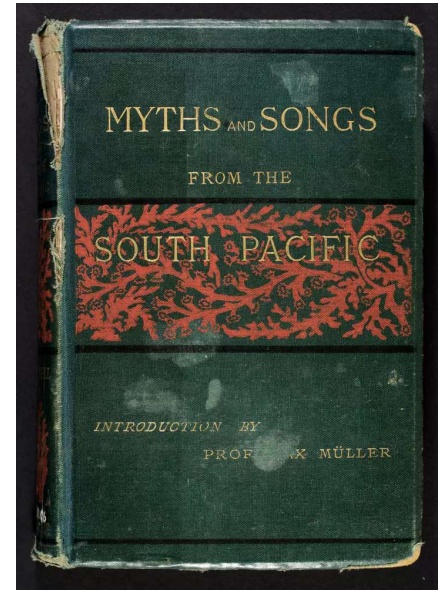
（私訳：「ヴェラに率いられた霊たちの最後の旅立ちの準備」）のタイトルと共に英訳された内容が掲載されている。

『南太平洋の神話と歌』の著者・William Wyatt Gill は、イギリスから現在のクック諸島へ赴いた宣教師である。彼は未開の地にキリスト教を布教すべく1852年から1872年にかけてマンガイア島に赴任し、口頭によってのみ伝えられていた（当時のマンガイア島をはじめとしたポリネシア諸国は“文字”を持っていなかった）現地の文化、伝説、風習の記録に邁進し、その中で出会ったマンガイア島の哀歌（悲歌、挽歌）をヨーロッパに持ち帰ったのである。〈ヴェラ〉の英訳の内容は冒頭で紹介したsydowによるドイツ語訳とほぼ合致するので、この本が《彼岸への対話》の“遠い祖先”ということ間違いなくであろう。

この本によると、キャプテン・クックが1777年にマンガイア島を発見する数年前（1770年頃）、島を統治していたのは神官であったNgara（ンガラ）、その甥であるヴェラは島の東部に生えていた神聖なるヤシの木（もしくは茅の木）の森に火をつけたことが神の怒りに触れ、その天罰で亡くなったと伝えられている。Tapu（タブ：触れてはならない神聖なるものの意。“タブー”の語源ともなっている）を犯したヴェラであるが、ヴェラの死は島の全土（とは言え、マンガイア島は足立区より小さい面積（Ten.鈴木洋氏談））に伝えられ、葬儀は神官・ンガラの立場もあってか盛大に（2週間ほどの期間、歌と舞踏を伴いながら。ラグビーのワールドカップの試合前の儀式で知られることとなった「ハカ」が舞踏のスタイルとしては近いであろうか）行われたようである。

また、マンガイア島では神話に基づいた物語と別に、Veetini（ヴェティニーニ）という実在した人物へ捧げられた哀歌がヴェラの亡くなる以前からあり、その哀歌の形式にそって〈ヴェラ〉も書かれている。

私も『南太平洋の神話と歌』の全てを読み解けた訳ではないが、その書中にある解説や〈ヴェラ〉にまつわる物語、その他のマンガイア島にまつわる各種資料から『三木レク』の歌詩に登場する言葉を読み解き、【《彼岸への対話》辞書】と題してまとめてみた。



■ 《彼岸への対話》 辞書

【聴こえるか、友よ、海鳴りの声が】（第一楽章）

原詩は"Akarongo, Vera, i te tangi tai."とはじまり、辛うじて「聴いて、ヴェラ、潮の叫びを」と訳せる。

"tangi"は泣く／叫ぶの意。他の言葉と結ばれて別の意味の単語

（例：tangihanga="tangi"+"hanga(create などの意)"=葬式）にもなる。

【さあ、お別れの時が来た】（共通）

マンガイア島の歌謡はいくつかの章に分けられているものが多いが、その結びは必ず「同じ“サビ”の繰り返し（脚韻）」となっているのが一つの特徴。

原詩では“Tutu atu ka aere ; (意訳：立ち上がろう、飛び立とう)

O te uru matie kura ra e te nau. (儀式の場に集まろう、の意か)”

【喪服に花束】（共通）

1：伝統的な葬儀の服装として、幽霊のような網目模様が施された衣服をまとい、赤いつる草をターバンのように頭に巻いていたと伝えられている。

2：特に親族は、キャンドルナッツの赤い樹液で染め、タロイモ畑の黒い泥に浸した布をまとっていた。

3：花束に関する記述は確認できなかったが、おそらく現在のハワイでも見られる「レイ（花飾り）」と推測される。レイの文化は、12世紀頃にポリネシア人によってハワイにもたらされたと考えられており、古来より魔除や供物、社会的地位の象徴として用いられている。

【扁平な岩】（第一楽章）

マンガイア島は、島の周りが“マカテア”と呼ばれる高さ 60 メートル前後の古代からの珊瑚礁の壁に取り囲まれている。その西海岸のアレマウクと呼ばれる地域（地図③）に滑らかな珊瑚礁の岩があり、精霊の国へ通じる道のひとつとされていた。

【待とう】（一、二楽章）

マンガイア島では、死者の霊はまず東に集められ（地図⑥）、太陽の動きに沿って島を東から西へと横断し、日没と共にさらに次の世界へと旅立つとされている（ルート B）。東からの出発時期はマンガイア島での夏至の 1 月もしくは冬至の 6 月と伝えられている。

【きょうから住む国】（第一楽章）

いわゆる“冥界”のこと。当時のマンガイア島において、死後の魂は天上に旅立つ／地下界に行く両方の説が存在する。そのための通り道にも諸説がある。

【大口あいた墓穴】（第一楽章）

キリスト教が伝わる前のマンガイア島では、亡骸は生前の立場を問わず地下に通ずる洞窟に葬られるのが一般的だった（火葬や土葬の習慣がなかった）。マンガイア島に現存する洞窟内からは大量の人骨が見つかるなど当時の名残をそのままに見ることができる。

【海に近い真黒な岩壁の上】（第二楽章）

太陽を追って島を東から西へと進む霊たちの通り道は海に面した島の外周、つまりは島を囲む珊瑚礁（マカテア）の上である。地図上のグレーに色分けされた部分。

【南東の風】（第二楽章） = 【順風】（第一楽章）

1：“偏東風”とも呼ばれる熱帯域で恒常的に吹く風。

2：“貿易風”とも言われ、18世紀以前からヨーロッパから大西洋を横断する際の航海術にも欠かせなかった風。

3:マンガイア島では、聖霊の風（霊の動いてる様）は、北西ないし南西とも言われている。東西南北の概念がなかった当時は、風の動きや向きで方角を表していた。

【泣き虫ぞろいの御一同】（第二楽章）

W.W.Gill の書には、行き場を失った「泣き虫の霊たち」が登場する。この霊たちは「太陽を追いかけるのが大好きだった」と説明されている。

【指揮官】（第二楽章）

行き場のわからない霊たちを西へと導く存在。東からの出発時期を決める存在でもある。死後のヴェラが選ばれたのは、親族が神官であった故であろうか。

【たたずむ山々を視野からかくし】（第二楽章）

1:マンガイア島の最高地点は島の中心にある 169m のランギモテア山。地図④

2:山頂に迷い込んだ戦士の霊は、冬（または乾季。マンガイア島では6月）特有の雲となる。空はこれらの亡霊に覆われ、普通の雨雲とは区別されている。

【船出の場所】（第三楽章）

1:島の西にある Vairorongo（聖なる小川）がその一つとされている。地図②

2:そこへ急ぐのは愛する人の霊を追いかける遺族たち。島を（おそらくは反時計回りに）一周するのが哀悼の儀式の一つとされている。ヴェラの父 Mitimiti も愛する息子の魂を追いかけるが、その足元は鋭い岩道（マカテア）であり、素足で歩けば足を痛める危険な道のりである。

【彼岸への道】（第三楽章）

原語訳では「ラウパの洞窟」。ヴェラが葬られた深さ 150 フィートの恐ろしい裂け目。地図⑤あたり。

【道の半分】（第三楽章）

原語では"Auneke"。マンガイア島では「朝日と夕日のほぼ中間にある海岸の点」とされていて、これは英訳→独語訳の過程で「道の半分」と訳された。

【日が落ちるか】（第三楽章）

- 1: 霊たちが動くことの出来るのは太陽の出ている間だけとされている。
- 2: 霊を追いかける遺族も闇夜の中での移動は困難である。
- 3: 日没後は霊も遺族も休息の時である。

【棕櫚】（三&四楽章） = 【松の林】（第一楽章）

- 1: 原詩に書かれているのは厳密には Pandanus というタコノキ属の常緑小高木。
- 2: 肉体を失った（現身の無い）霊たちの絶好のたまり場とも伝えられている。

【蟋蟀】（第四楽章）

マンガイア島には僅かながら生息しているとされる。「蟋蟀の精が鳴いている」ということわざがあり、夜な夜な聞こえてくるその鳴き声は、戦士の魂が悲しげに仲間呼びかける声とされる。

【後髪】（第四楽章）

マンガイア島の男性の成人の儀式として断髪（剃髪）が今も残っている。若くして亡くなったヴェラは儀式を迎えることなく、長髪のまま葬られたのであろう。

【甘い香りの花の芽】（第五楽章）

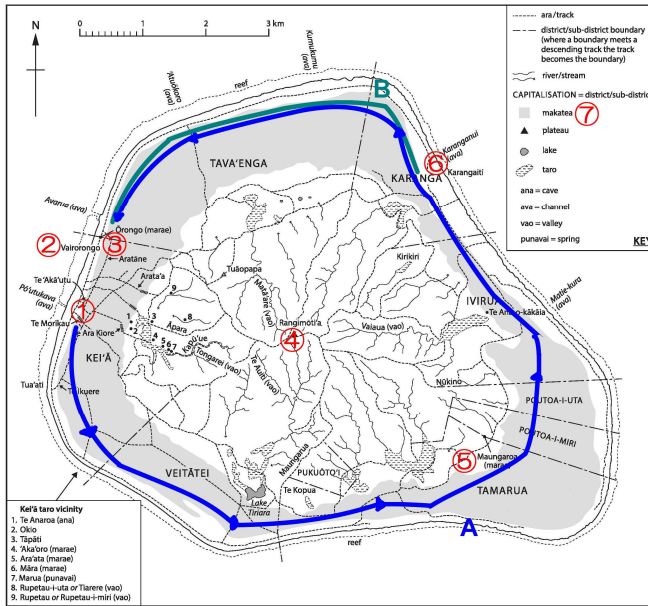
- 1: 白いクチナシや黄色いプルメリア、パンダナスの黄金色の果実など。
- 2: 戦士した英雄の霊はこれらをまとっているとも伝えられている。

【佳い匂いのする繁葉】（第五楽章）

日本では「香水草」と呼ばれるヘリオトロープの一種と推される。

■結び

『南太平洋の神話と歌』で説明されている内容には惨たらしい伝説や風習もあり、キリスト教の伝来と共に淘汰されるのも必然的で、おそらくは現在のマンガイア島を訪ねても、『三木レク』に通ずる詩や音楽のルーツは遺っていないと思われる。原語→英語→ドイツ語→《浜野著》を経て、三木那名子が完成させた《彼岸への対話》は、失われたニュアンスとメタモルフォーゼされたものも多々ではあるが、実際に歌う皆様が上記から「私はここが面白い！と思った！」箇所にそれぞれに想いを注いでみて（30年前の私は「南国にも“喪服”があるのか！と感動した）、松井慶太マエストロの新しいアプローチを引き出してみれば幸いである。



ルート A: 哀悼者の歩む路 (推測)

現在では道路が整備されているが、18世紀当時はいわゆる“獣道”であっただろう。ヴェラの眠るラウパの洞窟を経由し（時には一晩を洞窟内で共にし）、一周約30kmの道を2週間ほどの間に何周も回ったと思われる。

ルート B: 死者の魂の歩む路

死者の魂の進む路は「内陸を極力避けて」と伝えられている。

① Oneroa village (オネロア村)

島の中心街。現在もこの一帯に複数の教会が存在する。

② Vairorongo (聖なる小川)

マンガイア島の統治者と神官のみが沐浴していた場所。20世紀後半に遺跡として発掘された。

③ Aremauku (アレマウク)

現在も地名の残っている地域。オネロア村の一部である。

④ Rangimotia (ランギモウジア山)

頂上は169mながら、島の全景を見わたすことができる。ヴェラの父 mitimiti も亡き息子の魂の行方をここから探したのだろうか。

⑤ cave Raupa (ラウパの洞窟：推測)

ヴェラの埋葬された洞窟は島南西の Tamarua (タマルア) にあると伝えられている。

⑥ Karanga-iti

東から西へと向かう霊たちの集合地点のひとつ。現在では空港の整備された一帯。

⑦ Makatea (マカテア)

島を囲む珊瑚礁の一帯。